

氏 名	わし はら く に こ 鷺 原 具 仁 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 382 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	近世後期漢詩文の研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 大 谷 雅 夫	教 授 木 田 章 義	助教授 大 槻 信
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

近世中期、荻生徂徠とその門人たちの古文辞格調派（古文辞派）によって導かれた詩風は、初・盛唐詩とそれを範とした明詩に倣ったものであったが、近世後期には、中・晩唐詩や宋詩に倣って詩を作ろうとする新しい詩風が、清新性霊派（性霊派）の詩人たちによって導かれた。このことは、近世の漢詩史において、大きな転換点となった。

古文辞派批判の急先鋒であった山本北山は、『作詩志藪』（天明三・一七八三年刊行）を著し、当時、一世を風靡していた古文辞派の詩風を盛唐詩の模擬剽竊であると言って退け、剽竊でない清新の表現によって、自己の真情（性霊）を詩に詠むべきだと主張した。

徂徠たち日本の古文辞派の詩風は、唐詩の模擬剽竊にのみとどまっていたのではなく、作者の心情や個性を反映する面もあったことや、初・盛唐詩や明詩の語彙や表現を借りることで、眼前の現実を離れ、唐土の人士になりきって自己を解放し、想像の世界に遊ぶことができるという魅力を備えていたことが、これまで先学の研究によって明らかにされてきている。

しかし、唐の辺塞詩に倣って、「塞下曲」「従軍行」といった題で、中国の辺境の地で、異民族と戦う兵士の悲哀を詠んだ詩などは、太平の世に生きる日本の詩人にとって、どこまで切実なテーマであったのか疑わしい点もある。擬古によって想像の世界に遊ぶという古文辞派の浪漫的な作詩方法は、詩人の現実の境涯から乖離し、時に古人から借りた言葉だけが一人歩きし、単なる「模擬」に陥る可能性を抱えていたのである。

近世後期、性霊派の詩人たちも、中・晩唐詩や宋詩に学び、その語彙や表現を借りて詩を作ったという点では、「模擬」であることに変わりはないのだが、詠じられている内容と、詩人を取り巻く現実との関係に必然性があるという点で、古文辞派の場合と大きく異なっている。

近世後期には、陸游・范成大・楊万里といった南宋三大家の作品を中心として、南宋の詩が愛好され、よく学ばれた。そこに詠じられている江南の穏やかな田園風景や市民的な日常生活は、日本の近世後期の詩人たちにとって、自分を取り巻く現実と、感覚として近いものがあつた。言い換えれば、南宋の詩に学び、その語彙や表現を借りることで、日本の詩人たちは、自分たちを取り巻く身近な現実の中にも、詠じるべき詩情や風景があることを新しく見いだしてゆくことになったのである。

以上のような展望の下、本論文は、近世後期の詩人たちが、自分を取り巻く現実の中から、どのように詠じるべき詩情や風景を見いだし、作品として形象化していったのか、という点について、個々の詩人の作品を辿りつつ、明らかにすることを試みたものである。

まず、本論文第一編第一章から第三章までは、詩人にとって最も身近な現実であつたと思われる家族を詠じた詩について論じた。先述したように、山本北山は古文辞派を批判して、剽竊でない清新の表現によって、自己の真情（性霊）を詩に詠むべきだと主張したが、この主張を詩作において実践し、成果を挙げたのは、理論家の北山ではなく、江戸の江湖詩社や、その流れを汲む詩人たちであつた。彼らは、清新性霊派（性霊派）と呼ばれた。

中でも、江湖詩社の詩人たちは、和習を退けず、初夏の初鰯や両国の花火など、眼前の江戸の風物を詩の題材として取り上げることで、等身大の叙情を自己の真情として詠じた。これと同様に、身近な現実の中に見いだされる詩の題材として、家族を詠じた詩は、数は少ないながらも、次第に広く詠まれるようになってゆく。

元々、中国では、「内言は梱を出でず」（『礼記』曲礼上）と、家庭内の婦女子の話は家の敷居の外には持ち出さない、という儒教の規範の影響があって、古くは陶淵明など一部の例外を除けば、また悼亡詩は除けば、妻や子を真正面から取り上げて、詩に詠じることはあまりなかった。しかし、その規範は、詩の世界において、絶対的な規範であり続けたわけではなかった。中国文学者の中原健二氏や野村鮎子氏などの研究によれば、中唐の頃から妻などの家庭内の女性が詩に詠じられるようになってゆき、宋代に至っては男性が妻を詠じることに何らの躊躇も示されなくなり、妻への思いや妻を対象として詠じることが定着したのだという。

想像の世界に遊んだ古文辞派の詩人にとって、自分の家族などという足元の現実とはなり得なかったが、身近な現実の中に詩情を求めた性霊派の詩人にとっては、家族は、取り上げやすい題材であったと考えられる。

第一編第一章「市河寛斎の娘を詠む詩について」は、江湖詩社を主宰し、江戸における性霊派の代表的詩人であった市河寛斎（1749—1820）の家族を詠じた詩を取り上げたものである。寛斎には、事情があって赤子の時に手放した長男のことを詠んだ「孤松行」という詩があるが、この詩は、若かった当時の寛斎にしては珍しく、十六句にのぼる長編で、まだ寛斎が古文辞派の詩風になじんでいた頃の作である。幼い我が子を手放すという痛切な経験が作品の根底にあって、時季が来れば誰もが目にすることのできる花や月を詠じるのとは事情が異なる。家族を詠む詩は個々の詩人の運命的な事情に左右されやすく、詩風や詩論による分類だけでは割り切れない面があることを、それは示しているであろう。

やがて、江戸に出た寛斎は、再婚して二男五女に恵まれる。寛斎の詩において、息子たちは書画展览会や、陸遊に倣って梅を尋ねる散策に同伴する者として詠じられている。それに対して、娘たちは、父の珍客をこっそりのぞき見る無邪気な姿が詠じられている他、浪人時代の不遇な寛斎と静かに枕を並べて眠っている情景や、雨の日、門を閉ざして、寛斎と娘とが、ひっそりと庭の蟻の動きを見つめている情景などに詠じられており、いずれも場面は家の内側で、日常生活の中に訪れた静かな時間を詠じている。俗塵を避けるかのように門を閉ざし、ひっそりと我が子と共に家の中にいるという内容の詩は、寛斎が愛好した南宋の陸遊の詩にもあり、寛斎の娘を詠じた詩には、南宋の詩風の影響が感じられる。

また、寛斎には、家族の中、特定の誰かを詠むのではなく、「五女二男」「兄弟三人子八人」「二男五女二孫児」といった詩句に示されているように、元旦や自らの誕生日に家族全員を数え上げ、自分の人生の幸福度を点検するような内容の詩があり、こちらは、記念碑的な意味合いの詩であったと考えられる。

第一編第二章「村瀬栲亭の孫を詠む詩について」では、江戸の詩人寛斎に対して、ほぼ同時期に京都で活動した村瀬栲亭（1744—1818）の家族を詠じた詩を取り上げた。栲亭は、寛斎と年齢が近いというだけでなく、六如上人を通じて性霊派の新しい詩風を知る立場にあった。しかし、家族を詠じた詩について比べてみると、家族関係が各々違うためか、あまり共通性は見られない。

ただし、妻をどのように詠じているかを見てみると、寛斎も栲亭も積極的に妻の姿を形象化しようとはしておらず、日常生活を描写する中での点景にとどまっている。日野龍夫氏「漢詩と俳句」（『日野龍夫著作集』第二巻、ベリかん社、2005年）は、日本文学の伝統では、男性にとっての女性は、恋人である間は文学の素材であり得るが、妻になってしまうと、その資格を失うのに対して、中国文学では、妻が正統的な素材の一つである。日本の漢詩において妻への愛情が詩の主題として取り上げられているのは、そのような中国の詩の影響によるもの、と指摘する。しかしながら、旅などで遠く離れた状況で妻を思って詠じた詩を除くと、日常の妻の姿をうまく捉えた詩は、近世後期の詩においても、それほど数は多くないように思われる。中原健二氏は、宋代の妻を詠んだ詩の特徴として、離情だけでなく、日常の妻の姿も詠んでいる点が挙げられることを指摘しているが（「夫と妻のあいだ—宋代文人の場合—」、荒井健編『中華文人の生活』所収、平凡社、1994年）、宋詩がよく学ばれた近世後期ではあったが、中原氏が指摘するような特徴は、あまり摂取されなかったのである。

また、寛斎が外出に息子を同伴したように、栲亭も、花見や紅葉狩りなどに息子を同伴したことがいくつかの詩題から窺えるが、いずれの詩も、内容を見ると、息子には全く触れられておらず、美しい景色への賞賛だけが示されている。

以上のように、栲亭の詩からは、妻や子について、積極的に詩に詠もうという姿勢は感じられないのだが、孫については、

その可愛らしさを詩に詠んで形象化しようとする意図が明白に感じられ、また、孫の描写には、陶淵明の詩の影響が看取される。

栲亭の孫を詠じた詩の根底には、もちろん孫に対する愛情があるのだが、それに加えて、晩年の栲亭が有していた「閑」と「世情」という振幅の中、一方の「閑」の生き方を支える大切な要素として、孫が捉えられていたという事情がある。俗世間を避けて孫と遊ぶ幸せを詠じる一方で、栲亭は若い頃から社会批判の詩を詠むなど、「世情」に対する関心を常に持ち続けていた。「閑」と「世情」とは、一見、対極に位置するもののようだが、共に現実への関心という同じ源に端を発するものである。

第一編第三章「頼山陽の母を詠む詩について」は、寛斎や栲亭よりも、一つ下の世代にあたる頼山陽（1780—1887）の母を詠じた詩を取り上げた。中国では、追憶として母を詠じる詩は存在するが、眼前の生身の母を主題として詩に詠じることは、ほとんどない。儒教の規範の影響で、尊属にあたる母を直接詠じることを避けるからである。中国に比べて儒教の規範が緩やかであった日本の近世においては、少数ではあるが、母を詠じた詩が存在する。だが、母というものは、健在である時は、あまりにも日常的で平凡な存在であると感じられるからだろうか、母の日常の姿を詠む詩は、日本においてもあまり見られない。日本近世の詩人による眼前の母の姿を詠じた詩は、母子間の愛情や関係が特別に強いなど、特殊な事情が背景にある場合に作られている。

山陽の場合、中年に至り、京都に居を構えて落ち着いた頃から、しばしば母を故郷から招いて、物見遊山に連れ出している。そして、遊覧の途上、「覚他ゆ 慈顔 別様温かきを」「慈顔 自ら十分の春有り」「慈顔 方に暢栄」といった詩句に示されているように、「慈顔」（母の顔）が、幸せそうに輝いていることを繰り返し詩に詠じている。いかにも親孝行な息子という印象を与える話だが、実際には、若年の頃、脱藩の罪を犯して、廃嫡されるなど、山陽は、長年、母には心配と迷惑のかけ通しであった。山陽は、孝行の気持ちに加えて、母に対する贖罪の念があったので、殊更に幸せそうな母の姿を繰り返し詠じたのだろう。その意味で、山陽の母を詠じた詩もまた、他の詩人の母の詩と同様、特殊な人生経験という現実に導かれたものであったと言えるのである。

第一編第四章「頼山陽の詠史詩」では、山陽の詠史詩は、幕末の維新の志士たちによって愛唱され、尊皇精神を情緒的に盛り上げる役割を果たしたとされているが、作者である山陽自身は、詠史詩についてどのように考えていたのか、現実の社会への働きかけということを意識していたのか、という点について考察した。

山陽の詠史詩には、詠史詩集『日本楽府』に収められたものと、『山陽詩鈔』『山陽先生遺稿』に収められたものと、大きく二つに分けられる。『日本楽府』は、日本史から題材を得て詠じた楽府体の詩を六十六首収めた書物である。「楽府」という形式自体、国家や社会のため、詩によって世の中を諷諭するという伝統を背景に有しており、また、山陽自身も歴史を詠じることは切り離された過去を詠むだけでなく、現代に向けて議論を発することでもあったと考えていたようなので、そういった点から、『日本楽府』を詩壇における現実への関心の高まりという流れの中で、捉え直すことができるのではないかと述べた。

第二編では、頼山陽の地形という眼前の現実への関心が、新しい風景の発見につながったことについて論じた。まず、第一章「頼山陽「耶馬溪図巻考」—その題画記をめぐって—」においては、従来、険しい岩がそそり立つ溪谷としか考えられてこなかった場所が、山陽が訪れて耶馬溪と命名し、詩文によって賞賛したことで、九州の新しい名勝地となったことを取り上げた。耶馬溪の発見以後、全国各地において出現した新しい風景の発見という現象の背景には、文人たちに愛好された中国の南宗画の風景観の影響がある。また、直接画と関係のない漢詩の風景描写においても、中国の画論の用語が用いられていることから、画の影響が広範にわたったことが看取される。

第二章「頼山陽の自然詠—特に山について—」では、山陽が書斎から眺められる京都の東山をただの山ではなく、友人であると捉えて詩に詠じていることに着目し、このような山に対する親近感とは、小川環樹氏が「自然は人間に好意をもつか—宋詩の擬人法」（『小川環樹著作集』第三巻、筑摩書房、1997年）という論文で指摘している、自然を人間に好意をもつものとして捉える宋詩の影響であることを述べた。また、山陽の自然詠には、視点の移動という特徴が見られるが、同じ特徴が、宋の蘇軾の詩に見られることが、山本和義氏によって指摘されている（「蘇軾詩論稿」、『詩人と造物—蘇軾論考』所収、研文出版、2002年）。山陽は、蘇軾の詩を愛好していたので、「視点の移動」という特徴は、蘇軾の詩の影響を受けているので

はないかと述べた。

論文審査の結果の要旨

漢語による文学表現が、国文学史上、非常に重要な地位を占めることは、それらが各時代最高の知識人の精励の成果であり、各時代の文学・思想の頂点にあって常に他を領導する存在であったことを考えるならば、改めて言うまでもないであろう。しかし、にもかかわらず、国文学研究においてそれら漢文学が最も研究のたち遅れた分野でありつづけていることは、近代西欧化の代償にわれわれが漢文学を読み、楽しむ能力を急速に失ってしまったことを第一の原因とするが、それだけではない。江村北海『日本詩史』は、日本の文学は中国文学の氣運を約二百年遅れて追うものと喝破したが、確かに、例えば、「文は秦漢、詩は盛唐」と、作詩文は須く古文辞に倣うべしと唱えた明の古文辞派の影響を荻生徂徠らが受け、逆に、古文辞派の作を千篇一律に陥るものと批判して、自己の真情、身近な現実をこそ詠うべしと主張した性霊派の文学論が江戸後期に広く流行したのも、それぞれ中国文学の思潮を百年から二百年も遅れて追う実例であった。日本の漢文学は中国のその稚拙な模倣に過ぎず、そこに独自性を見いだすことは難しい。そのような実感が、日本の漢文学の研究に手を染めることを多くに躊躇させるもう一つの大きな原因であった。

本論文は、その中において、江戸時代後期の詩人のうち、市河寛斎、村瀬栲亭、頼山陽の詩を読解し、その独自な意味を考えようとするものである。それらの詩は、上にのべた性霊説の影響を濃厚に承けるものであり、中国文学の模倣と言われても仕方のない面をもつ。たとえば、第一編で寛斎や栲亭の娘や孫を詠む詩が紹介されているが、栲亭が用いる「稚孫」という詩語は、南宋の陸游の詩に頻繁に用いられるそれを襲うものと考えられる。古文辞派の盛唐詩模倣を批判する立場の詩人でありながら、自らは南宋詩を模倣するという皮肉な事態が生じているのである。しかし、たとえそうであっても、自己の真情、身近な現実を詠むべしという性霊派の主張は、彼らの詩を、やがて、否応なく彼ら自身の現実の生活に近づけてゆくことになる。論者は、市河寛斎の娘を詠んだ詩、村瀬栲亭の孫を詠んだ詩を一首一首丁寧に読解し、それらが南宋詩の影響を蒙りつつも、自らの家庭生活における慰めを娘や孫のいたいけなない姿の描写の中に表現したことを論じ、あるいは、頼山陽の母を詠んだ詩からは、青年時代の放蕩で親を苦しめたことへの贖罪の念を、母とともに旅行する喜びを詠うことによって山陽が洩らし、また『日本楽府』という詠史詩からは、詠史という方法こそ中国の詩に由来するものであるにしても、他ならず日本の歴史を詩に詠みこむことに山陽が「暗に議論を藏」し、当代の日本の現実に働きかけようとしたことを読み取った。それらの論は、必ずしも明晰に展開されているとは言えず、また詩の読みもすべてが正確とも評し難いが、しかし、いずれも江戸時代の漢詩にその独自な価値を見いだそうとする真つ当な試みであり、困難な条件のもとでなお着実な成果を得たものとして高く評価できるであろう。

第二編第一章は、頼山陽の「耶馬溪図巻記」を取りあげて、それまでは山深い溪流と意識されるに過ぎなかった九州の山国川の周辺が、この山陽の作以来、天下の景勝「耶馬溪」と喧伝されるに至ったことを説き、それが中国南宋画の美意識に基づく新たな風景の発見であったことを、当時の画論とこの「図巻記」の表現を照合することによって論じた。また第二章は、山陽の動的な自然描写に蘇東坡の詩の「視点の移動」の影響が見られることを詳細に説いた。いずれも、頼山陽というすぐれた詩人によって、中国文学・美術の美意識により日本の風景が見直され、新たな美が発見されたことを論証する。中国の詩や美術の把握については先行研究にやや安易によりかかり、考証にも緻密さが欠けるという印象が否めないが、江戸時代後期における自然観の刷新と中国文学・美術との関わりという新たな研究課題を見いだした功績は、それらの欠点を補ってあまりあるものと言えよう。読解と論証の力を更に高め、江戸漢詩研究の発展のために尽力することを今後の論者に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十九年一月九日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。